第５回大田市学校のあり方に関する実施計画検討委員会 会議録

日　時	令和２年７月３１日（金）　１４：００ ～ １５：５７		
場　所	大田市役所　４階講堂		
出席者	委　員：　１９名／２３名 （欠席：山根智成委員、谷口志保委員、吉田真子委員、中田敏彦委員） 事務局：　船木教育長、川島教育部長、 勝部総務課長、和田学校教育課長、後藤社会教育課長、 藤原まちづくり定住課長、布野子育て支援課長、田村子ども家庭相談室長、 森総務課長補佐、寺岡総務管理係長、 岡田学校教育課指導講師（ｸﾞﾗﾌｨｯｸﾚｺｰﾄﾞ担当）		
傍聴人	９名	報道機関	２社（山陰中央新報、島根日日新聞）
次　第	別紙のとおり		
概　要	以下のとおり		
附　記	本委員会は原則公開		

１．開会（進行：勝部総務課長）
・委員の半数以上の出席を確認後、本委員会の成立を報告
（検討委員会設置要綱第６条第２項による）

２．協議（議長：岸本委員長）
・あいさつ
前回は重点的取り組みの実施のうち（2）自立と共生まで進んだ。
今日は、改めて（1）ふるさと教育、（2）自立と共生についてお聞きしてから、
（3）教職員の働き方改革に進みたい。

【協議事項】
学校のあり方に関する実施計画（案）　重点的取り組みの実施のうち
前回協議した（１）ふるさと教育、（２）自立と共生について、意見を求めた。
次に、（３）教職員の働き方改革について、事務局（勝部総務課長、和田学校教育課長）より説明。
最後に、重点的取り組みの実施全体について、意見を求めた。

協議事項に係る質疑応答　（３）教職員の働き方改革

発言者	内　　容
平田委員	部活動のあり方について、三中校区から一中に行く生徒の多くは部活動が影響していると思う。子どもがやりたいことをさせてやりたい。住んでいる地域の学校に通い、部活動は別の場所で行うことができないかなど今後対策を考える必要があるのではないか。
川島部長	部活動は学校教育の一環として行っている。部活動で問題となっているのは、子どもの数が少ないので、部活の数が限られてくるという状況である。また、指導者がいないということもある。教員の中に指導者がいないので、地域の方に指導者として入っていただく仕組みを作っている。地域によっては、関与していただける人がおられないということも課題となっており、どうやって解消していくかが大きな問題となっている。

発言者	内　　容
松場委員	教職員自らの改革推進について、先生方の意識を変えていくことも大事だが、それと同時にＰＴＡも保護者も意識を変えていかないといけない。学校、ＰＴＡ、保護者へのアプローチについて何か工夫をされているのか。
川島部長	学校の現状を保護者や地域の皆さんに知っていただくところから始まると考えている。そのためには、学校運営協議会において実態をお示しして、課題がどこにあるのか率直に話し合う必要がある。今後取り組んでいきたい。
渡利委員	部活動のあり方の見直しについて、部活動をやりたいという情熱のある教員もおられるし、しんどいというタイプの教員もおられると思う。部活動を実施する日や時間など一律化してしまうことはどうなのか。
川島部長	平成 30 年度に部活動ガイドラインを策定している。時間を束縛するという意味よりも、教師も生徒も部活動に対する意識改革を含めて取り組んでいくという内容である。教職員、保護者、生徒も含めてしっかり理解していただいて本当の議論をしていただきたい。
岸本委員長	部活動は任意であり教員が主体となって指導してきた歴史がある。小学校の部活動はなくなり社会体育化され、今は中学校が主となっている。 地域の各種団体にお手伝いいただきながら移行できればどうかという話である。平田委員さんの発言にあった、部活動はどういう風なやり方がいいのかという話になる。非常に深い幅広い話になる。 藤井先生に中学校の現状をお話いただきたい。
藤井委員	部活動のガイドラインについては、平成 31 年 2 月に策定した。部活動については、これまでの量的なものよりも質的なところに視点を移していく必要があるのではないかということで、第 3 日曜日がしまね家庭の日で休みとしており、土日は月に 4 日以上休むことにしている。また、土日の活動は基本的に 3 時間程度にしている。ただし、吹奏楽部では、コンクール直前などに夜間練習などを行うが、代わりに休養日をとることにしている。 一中では、今年度教員の定数が減った関係で、部によっては男子と女子両方を一人の副顧問がみるというしんどい状況になっている。 保護者さんの中には、しっかりやってほしいという意見もあれば、生徒と学校の先生が目標を決めてみんなでがんばっていく過程が大事じゃないかという意見もある。
岸本委員長	広くて深い問題がある。 学校の外でも受け皿を作って、できるところでやっていこうということで教員の負担を減らしていこうという実施計画案になっている。 部活動そのものについては、部活動のあり方検討の中でしっかりやってこられたと思うので、様子がわかれば次の機会にでも紹介していただければと思う。
松場委員	コロナウイルス感染の影響で部活動も今までと違ったものに変わってくると感じている。そういう中で、キーポイントとなるのが総合型地域スポーツクラブではないか。そういうことで、大田市でも学校のあり方に関する基本方針の 12 ページで示されていると思っている。一方、急には部活動を地域にお願いすることはできないと思う。 大会に参加するのに、指導者に一定の資格が必要と聞いたことがある。
藤井委員	学校の部活動を指導することについては、資格は必要ない。
松場委員	部活動の質が落ちてしまうのは心配である。
岸本委員長	地域指導者や部活動指導員については、肩書きが付くし、謝金もある。それなりに認められた方であり、研修も行うことになっているはずである。

協議事項に係る質疑応答　　５　重点的取り組みの実施全体について	
発言者	内　　容
平田委員	ふるさと教育は幅が広い。大田市で行われているふるさと教育のデータが示されていたか。
和田課長	学校のあり方に関する基本方針に各学校の概要、何年生がどんなことをしたのかを載せている。また、教育の日フェスタで各学校の取り組みを発表した。
川島部長	学校のあり方に関する基本方針の資料編の 20 ページ、資料 13 で各学校のふるさと教育の内容を載せている。
渡邊委員	(2) 自立と共生の①から⑥までは、これまで重要とされてきた教育をしっかりやっていくということだと思う。一方、世の中がめまぐるしく変わっていき、どんどんグローバル化が進む中で、これからにむかった教育をどう先手をうってやっていくのかが、かなり重要になってくる。一般にはＳＴＥＭ教育といっている。ＳＴＥＭとは、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、数学のことである。大田市がＩＴに積極的に取り組んでいることから、小学校からどんどんＩＴ教育をやっていくとか、未来教育に対してどう向き合うかというものがない。ほかに英語教育などについても、未来をにらんだ教育を盛り込んだほうがよい。 教職員の働き方改革の中で、部活動のあり方として教員の適正な働き方というのは大事なポイントであるが、何よりも子どもたちの成長にとって非常に大事なことなので、もっと上の次元で、(2) の自立と共生に大田市は部活動をこれからどういうふうに取り組んでいくのかが示されるべきである。
岸本委員長	これからの教育という未来志向のところがあまり見えない。前回もふるさと教育のところで、大田市ならではのものという話が出ていた。こういった視点は、大事だと感じている。この点について、皆さんからの意見をいただきたい。
田中委員	大田市はこういう子どもを育てたいという議論が地域でされていない。
川島部長	総合計画、教育ビジョンの中で、大田の教育についての理念を掲げてお示ししてきた。これらを踏まえて学校のあり方の基本方針、今回の実施計画がある。 大田市全体で同じようなことではなく、それぞれの地域でどんな子ども像を描きながら学校と一緒になって地域が育んでいくのかという議論が必要である。ふるさと教育の項目にある学校運営協議会をすべての学校において立ち上げ、議論していただく場が必要であり、教育委員会としてもしっかりとやっていきたい。 渡邊委員が言われた未来志向の教育については、グローバル化、ＳＤＧｓとかどんどん新しい言葉が出てきている。最近では、ＧＩＧＡスクールということで、昨年の 12 月に文部科学省が示した。実施計画案の中には盛り込まれていない。 ＩＴ、英語教育は全国的なことであり、否応なしに対応していかなければならない。その中で、重点的取り組みの中に、どのように特徴づけていくのかということである。新しい項目についてはどこかで記述する必要があると考えている。
渡利委員	光化については大事なことであり、地域によって差がないことがよい。皆さんの地域では光化されているのか。
川島部長	昨年と今年で、市内全域が光化されるよう取り組んでいる。
岸本委員長	学校現場はどのような状況なのか。
藤井委員	一中では、コロナウイルスの関係で全校集まって会議をすることができないので、ズームを使って各教室で視聴する方法をとっている。

発言者	内　　容
岩谷委員	小学校では、今年度、ＩＴ関係の環境を整えるということで進んでいる。校舎内でリーモトが使えるよう研修を行ったり、少しずつ実験的に取り組んでいる。休校中に子どもたちの家庭に届けられるかということになると、地域での環境作りが大事であるので、今後教育委員会と相談しながら、市の施策として取り組んでいくものと考えている。
渡邊委員	高校では、県の方で今年の夏休み中に通信環境の強化を行う。
吉川委員	県が、ハード面は整備してくれる。ソフト面については、研修を受けたりして活用できるよう取り組んでいる。校内では、双方向の授業ができるようになっている。
川島部長	小中学校において、今年度光ネットワークの整備を行っている。また、児童生徒一人一台のタブレット端末を整備する。端末だけでなく学習支援ソフトを含め今年度調達に向けて学校やＩＴの専門家と協議し整備していく。
岸本委員長	ＩＴ教育とか未来教育という言葉が出ている。また、英語教育や部活動のことについて、建て付けとしてこの中に組み込む事ができるのか、大田で取り上げる必要があるか非常に難しい問題である。一度事務局で検討してもらいたい。
岩谷委員	前回にも同じ事を言ったが、大田市が何を目指していてどこに向かっていくのかわかりにくい。網羅的に感じる。書く順番や表現の仕方を検討してほしい。
髙橋委員	部活動のことを自立と共生のところに追加できないか。というのは、学校再編のところにも繋がってくるが、部活動が、人数によってはできる部、できない部がある一方で、少ない人数でも頑張って苦労して行われている部もある。三中の吹奏楽はほんと数人で昨年全国大会に出場した。テレビでとりあげられた。これだけできるんだということは、一人一人の責任感であったり、自立だったり、使命感だったり、そういうことが育っていくのではないかと思う。
笠井委員	乳幼児期の根本的なところを（2）自立と共生の①に盛り込んでもらいたい。
渡邊委員	ふるさと教育については、歴史的には20年近くたっており、島根県の各市町村でかなり本気に展開されている。一方、もうちょっと先を見て、地域に人が戻ってくる仕組みづくりという観点で見たときに、これまでのふるさと教育をしっかり振り返って、大田のふるさと教育はすごいという形になっていくのが理想的だと思う。 ふるさと教育の推進は、純粋な教育の話だけでは進まないところがあるのではないか。島根県のふるさと教育を振り返る時期になっていると思う。
川島部長	渡邊委員さんの思いとおなじようなことを考えながら案として書いたつもりである。今までやってきた各学校の取り組みも資料で示しており、そこを踏まえた上で、ふるさとへの愛着だけではなく、地域に残るあるいは貢献するという思いを強く抱いてもらいたいということで書いたつもりであるが、もっと強力に出るようにということだと思うので、検討する。
松場委員	ホワイトカラーの人材が多くなっている中で、社会が求めているのはブルーカラーの人材になりつつある。両方持っているのが大田市である。日本のすばらしい文化が大田市にはたくさん残っている。そこに、ふるさと教育とか部活とかが掛け合わされて、地域の底上げになる。子どもたちにとってもキャリア教育、ふるさと教育で自分を見つけることになる。 「キャリアパスポート」に、地域の人が書けるような項目があればもっとよいと思う。
川島部長	地域の人に深く関わってもらうことが大切であり、そういった場を各学校の中で作り上げていきたい。

発言者	内　　容
石田委員	ふるさと教育の究極のところは、親が自分の子どももこういうところで育てたいと思ってくれることだと思う。そのためには、働く場も必要だし、地域の人が助けてくれるという安心感があるとよい。そういうところをみんなで考えていったらよいと思う。
船木教育長	ふるさと教育について、貴重な提案をいただいたところである。 なぜふるさと教育をしないといけないかというと、地域の未来を担う人材を育成する、人を育てたいということ、大田市として、ふるさととして生き残るために、ふるさとは大事なものだと子どもの頃から教えることである。 子どもがいったん出るのは仕方ないことだ。大田のために何かをしたいということで帰ってくる子どもやいろいろな都合で帰れないけれども心の中でふるさとを気にかけて何かの時には助言や手助けをしてくれる子どもを育てたいというのがふるさと教育である。 行政だけでなく地域、保護者一体となって取り組まなければならないと考える。
渡利委員	ふるさと教育を受けた子どもたちがどのくらい帰ってきているのかを追跡調査したものがあるか。
川島部長	正確なデータと言われるとないと思う。
渡邊委員	県としてもそのことをすごく知りたいが、とても難しい。
吉川委員	邇摩高校の卒業生について調べたところ、20 年ぐらい前の地元への就職は 2 割から 3 割であったが、最近は地元への就職が 8 割から 9 割、そのうち半分は大田市に就職している。最近は地元志向が強い。地元に残って貢献したい子どもがたくさんおり、これはふるさと教育の成果だと考える。
藤井委員	ふるさと教育は平成 17 年に始まったが、4、5 年前に、ふるさと教育の視点が変わっている。 自分たちの地域にとって自分は何ができるか、何をする必要があるかということを学校の教育はもちろんであるが、社会教育の活動で地域の中に入っていって、自分にできることはなんだろうかとか、ものを自分で作り上げていくという視点がとても大事である。 地元に残りたいと考えることにおいて、石見神楽は強い要素と聞いている。地域にある文化、伝統を受け継ぎたいという子どもたちは帰ってくると聞いている。 地域ならではの人であったり、ものであったり、いろいろなふるさとの教育資源に子どもが正対することが大事だと考える。
岸本委員長	たくさん質問とか意見をいただいた。前回に指摘のあったことを含めて事務局において整理して示してもらいたい。
岸本委員長	ご発言のない方がおられるので、せっかくなので今日のところを中心にご発言いただきたい。
石賀委員	未来教育的な部分について、次回、次々回に、重点的取り組みの部分を修正してもらい、どなたが読んでもわかりやすい、大田市としてこういう子どもたちに育ってもらいたいというものを示してほしい。
山﨑まり子委員	「ひと・もの・こと」という言葉が好きである。人が財産であると思う。どこにいても、魅力のある人がいたりものやことがあれば、必ず振り向いてくれると思う。子どもの心を育てるのは人だ。人を育てることに尽力してほしい。

発言者	内　　容
大國委員	山村留学生は、夏休みに、コロナが流行している地域に帰って行ってまた戻ってくる。戻ってきてから、学校と山村留学センターをつないでオンライン授業をし、安全が確認されてから登校することにしている。 部活動については、プロ化するわけではないので、みんなが楽しくやったという経験の方が最後に残ると思う。いろんなドラマがあり、強いばかりがよいのではない。
山﨑哲也委員	ふるさと教育などについて、大田市の子どもたちにとって明るく楽しい未来を示してあげられるものであればよいと思った。
景山委員	先生方と保護者が向き合う機会は必要だと感じた。ＰＴＡ会長をして、先生の大変さに気づくことが多々ある。一人でも多く先生の大変さをわかる機会はあったほうがよいと感じた。
吉村委員	笠井委員が言われた、自立と共生のねっこのねっこの部分を担っているのが幼稚園、保育園だということに同感である。 幼稚園、保育園も地域にどんどん出て行って地域の方と触れ合ったり、地域の方をお呼びしていろいろな行事をしている。そういうことが小学校、中学校、高校と繋がっていくと、もっといいのではないかと思っている。
船木教育長	山村留学の関係の話があったので、詳しく説明したい。 山村留学生は 13 名おり、東京、関西、広島、福岡などコロナウイルス感染が広がっている地域の出身である。 ５月の連休は、保護者の元には帰らず、山村留学センターで過ごした。 夏休みとなると、そういうわけにはいかないので、既に保護者の元に帰っている。８月の盆過ぎには山村留学センターに帰ってきてもらい、２週間経過観察するが、この２週間のうちに学校が始まってしまう。４日間学校にいけない状況になるので、山村留学センターでオンライン授業をする。大田市では、オンライン授業は初めてだと思う。
三島副委員長	今日の話の中で、二つの方向が出た。未来に向かっていく方向をきちんと示してよいのではないかということと足元を固める、今やっている教育をしっかりと固めることも大事であるということである。 ウイズコロナの時代で、教育の多様性も出てくると思う。講義をしている専門学校では、完全にオンライン授業になっている。こういう状況の中で、学びあうということは気持ちのつながりがないと物足りないと感じた。オンラインの時代だからこそ原点に返って心のつながりあいが必要だと感じた。 足元を固める教育が全体で出てきているが、もうちょっと書き方を変えたり項目を加えてほしいという意見があった。また、未来の教育も示してほしいということもあったので、事務局で整理して市民の皆さんにわかるようにしていくことが大事である。 平成 17 年にふるさと教育を企画し立ち上げた。現場からは反発があった。ふるさと教育は、地域の伝統技能、技術を学ぶだけではない。ひと・もの・ことを通して、そこにいる人と出会うということだと思う。人と出会う気持ちよさが心の中に残っていくことが、将来的に地域のために何かしないとけないということにつながるし、地域に帰ろうということにつながっていくと期待している。 定住人口、交流人口に加え、もうひとつ出てきているのが、関係人口である。継続的にいろいろな形で関わってくださる方である。いろいろな人と出会う気持ちよさを教育のいろいろな場でやっていくこと、ふるさと教育の中でもたくさんできると思う。保幼小中高それぞれの段階で視点を設けながらやっていくことが実施計画に書かれていることだと思うが、見えにくかったら整理をする必要がある。

発言者	内　　容
三島 副委員長	もうひとつこれから大田市で頑張ってもらいたいのは、子どもたちがふるさと教育を通していろんな人と出会っていくことを周りの人からほめてもらったり認めてもらう場を大事にしてほしいということである。大田市内の地元の人だけでなく、たとえば出雲市の人がほめておられたということがあれば余計に子どもたちは張り切る。地域の方も、うちがやっている子どもとの関わりは、他の市町村、他の県でも評判よかったということになれば、余計いいかなと思う。このことにより、自分たちがやっていることを俯瞰することにもつながる。それがより自信になる。
岸本委員長	ふるさと教育については、教育長さんが言われたことがストレートに伝わればよい。そのまま出していただければよいと思った。 次回は、学校再編の考え方について、事務局から全体の説明をした上で、皆さんからご意見をいただきたい。

事務局から、次回の検討委員会の日程について周知

日時：令和２年８月２８日（金）　午後２時～

場所：　大田市役所４階講堂

以上をもって、第５回大田市学校のあり方に関する実施計画検討委員会を終了した。